子育てひろばエッセイ&フォト

あたたかな"つながり"がアウェイをホームに

子育て支援センター・子育てひろばで生まれた
あたたかな「つながり」のエピソード・写真集

子育てひろばエッセイ&フォト

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会

発行：ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会

NPO法人 子育てひろば 全国連絡協議会

子育てひろばは、どんなところ？

やさしい気持ちになれるところ
ひとりじゃないって思えるところ
よく来たねっていってもらえるところ
子育てを楽しいと思わせてくれるところ
子どもの成長を一緒に喜んでもらえるところ
子どもがいっぱいかわいがってもらえるところ
いろんなタイプの親子に出会い、自分は自分でいいと思えるところ
親子が元気になれるところ
本音で話ができるところ、しっかり話を聴いてくれるところ
認めてもらえるところ
思いが形になっていくところ
利用者が、支援者やボランティア側になれるところ
家族を超えた関係がはぐくめるところ

たくさんの　あたたかな「つながり」のエピソードとフォトが集まりました。
子どもを授かったら、子どもが生まれたら、親子の応援がしたかったら、いつでもお越しください。

目次

＊ペンネーム

出逢いに、ありがとう……みずのとまと＊◆埼玉県 4
一緒にあそぼう……村田さおり◆長野県 6
よく来たね……遠藤瑞生◆宮城県 8
ようこそ……二橋有美子◆千葉県 10
だるまさんところんだ……りく＊◆宮崎県 11
大好き……寺内由美子◆福島県 12
初めてのカーネーション……石橋美里◆埼玉県 14
双子育児を通じてもらった優しさ……さきあきあみ＊◆大阪府 16
笑顔もおなかもいっぱい……徳田昌志子◆香川県 18
みんなでお昼寝……きち＊◆兵庫県 19
引きこもりからの卒業……みなみかぜ＊◆茨城県 20
親も子も成長できる場……小倉真由◆大阪府 22
ミニトマトの思い出……田辺エミ◆静岡県 24
よしよし……クローバー＊◆福島県 26
ママのためのひろば　「子育て応援ひろば　ふぅ」……折笠友子◆新潟県 27
涙×2～私はダメママ～……ゆうくんママ＊◆東京都 28
Y君のおばあちゃんと子育て支援……山崎千秋◆兵庫県 30
子育て支援センター……村上由香里◆広島県 32
小さなお母さん……白石公子◆愛知県 34
パパと小麦粉粘土……さとちゃん＊◆埼玉県 35
子育て支援センターは親子が元気になれる場……おおやん＊◆群馬県 36
息子と向き合う……けいちゃんのママ＊◆香川県 38
わたしと家族の大切な居場所きらりんきっず……菅野あゆみ◆岩手県 40
親子で流しそうめん……たっちゃん＊◆福島県 42
こころのサプリメント……さくら＊◆熊本県 43
福島の大切な場所……熊谷みき◆福島県 44
思いが形に変わる時……齋藤啓子◆香川県 46
先は見ない。今をみつめる。……石綿亜梨沙◆山梨県 48
いつの間にかお姉ちゃんに。……Ａｎｎｅ＊◆岡山県 50
中学生と乳幼児親子のふれあい体験授業……江口幸代◆香川県 51
おもちゃをのせて…あたたかいつながりが生まれるひろばへ……よしぽん＊◆新潟県 52
金曜日のお兄さん……佐藤里枝◆岩手県 54
孤独な暗闇のトンネルの向こうに……どんぐり坊や＊◆福岡県 56
年子の二児の母……平野ユリア◆静岡県 58
なんで知ってるの?!……あこ＊◆福島県 59
ママバンド誕生の話……藤田知美◆山口県 60
花はきっと咲く……柴田亮◆北海道 62
私が救われた『つながり』……ポレポレ＊◆東京都 64
「またね」……長安里枝◆山口県 66
あしたもあそぼうね……あえばひろみ＊◆神奈川県 68
審査委員からのメッセージ……69
編集後記……75

■作品の掲載順は、順不同となっております。
■お名前、ひろば・センター名の記載の有無は、作者の希望に沿っております。
■掲載作品は、2017年7月～10月に応募いただいたものです。

出逢いに、ありがとう

「大丈夫ですか?」あの日掛けられたその一言に、私は本当に救われました。

うちの娘は、離乳食開始から全く食べない子どもで、最初は「母乳もよく飲むし、まぁこんなものだろう」とのんびりしていた私も、一日中「どうしたら食べてくれるのか」を考えているうちに10か月健診の頃にはすっかりノイローゼ気味に。

そして、そんな私をさらに憂鬱にするのが「お出かけ」。

周りは1歳前後になると、一日に二回くらい遊びに出ることが多いようでしたが、要領の悪い私は家事と育児をこなし、二回も遊びに出る余裕がとてもありませんでした。

周りのお母さん達はちゃんと出来ているのに…ご飯も上手く食べさせられないし、遊びも満足にさせてやれない…と自己嫌悪にどっぷりと浸かる日々。可愛い娘と一緒にいる幸せな状況の筈なのに、鬱々とすることがまた辛かったです。

そんなある日、何とか支援センターに娘を連れて行った帰りに「大丈夫ですか?何だかすごく疲れているみたい」同じく娘さんがおり、時折顔を合わせてお話するお母さんに声を掛けられました。「あはは、すみません。ちょっと疲れていて…」と笑うことしか出来ない私に、そのお母さんは気遣わしげな視線をじっと寄せ、「無理しないで下さいね。…あの、良かったらうちの車で送りますよ。本当にしんどそうなんで」と、申し出てくれたのです。驚きました。

たまに顔を合わせて世間話をするとは言え、私たちは相手のお子さんの名前しか知りません。どこに住んでいるのかも知らない、言わば素性のよくわからない人間です。そんな私を、彼女は心配し、助けたいと言ってくれた。その緊張した面持ちから、彼女が本来気軽にそういうことをするタイプではないことも分かっていました。

私はその気持ちがとても嬉しく、何かとても、救われたようなそんな気持ちになったのです。その一件以来、私たちはとても仲良くなりました。育児の悩みを語り合える、初めてのママ友です。娘達も月齢が近く、気も合うのか一緒に遊ぶととても楽しそう。支援センターに行っていたからこそ、出逢えた縁。後輩ママさんに支援センターは行く必要があるかと問われる度に「私は行って良かった!」と自信を持って答えています。

みずのとまと（埼玉県）

一緒にあそぼう

にじいろひろばの一角にある、電車とレールの遊び場で、心がほっこり温まる場面がありました。

その方向から、一人のお母さんの困り感いっぱいなおこったような声が聞こえてきました。小さな赤ちゃんを両手で抱きかかえながら、上の子（男の子）をおこっているようなお母さんの声でした。どうしたのかなぁ…と様子を見ると、その男の子が隣にいた男の子の使っていた電車を欲しがっていました。「もう、そんなことばかりするなら帰るよ…」と、赤ちゃんを抱えながら一生懸命我が子に声をかけますが、男の子は使いたい一心で、お母さんの声は届いていないようでした。電車が取られそうな子と、そのお母さんも、何とも言えない表情になっていきました。

私も声をかけに行こうかと考えていたとき、もう一組の近くにいた親子のお母さんが、「一緒にあそぼう！」と電車を欲しがっていた男の子に、やさしく声をかけてくれたのです。別の電車を見せて、その子と一緒にレールの上で電車を走らせてくれました。赤ちゃんを抱いていたお母さんも、「すみません」と恐縮しながら少しホッとした表情で近くに座りました。電車を取られそうになった男の子親子も、そのまま、そこで電車で遊ぶことができました。

「一緒にあそぼう」と声をかけてくれたお母さんの優しさが、その場にいた人たちの気持ちをそっと温めてくれた一場面でした。私もとっても心が温まり、優しい気持ちになりました。

村田 さおり（長野県）
中央子育て支援センターにじいろひろば

よく来たね

私は妊娠8か月の時、土地勘の全くない登米市に引っ越してきました。道もお店もさっぱり分からず、知り合いも一人も居ず、毎日一日でも早く里帰り出産のために実家に帰りたいと思っていました。

無事に子どもを出産し、登米に戻りましたが旦那さんは朝早くから遅くまで仕事の為、初めての子どもと二人きりの生活、一生続くのかと思うような寝不足の日々とよく泣く我が子に途方にくれていました。育児書と全然違う！

そんな時、助産師さんが置いていってくれたパンフレットにのっていた、南方支援センターに行ってみよう、と決心し、前の晩から支度をして、当日ドキドキしながら泣く子をなだめつつ向かいました。

どんな所だろう、さっぱり分からない。緊張して足を踏み入れると、先生達が「よく来たね～」と優しく迎えてくれました。

遊び場も広く、娘も楽しそうに先生に遊んでもらっている、私はなんだか分からないけど涙が出そうでした。

私は一人じゃなかったんだ。

それから支援センターに通い、同じ月齢のお友達も沢山でき、知り合いも増えて心細さが少しずつ消えていきました。毎日行ってもいい所があるのはこんなにも助かることなんだ。独身の時には考えもしませんでした。

南方の支援センターは先生方が子どもと遊んでくれます。親と色々な話もしてくれます。娘もお友達と先生と、貸して、どうぞなど色々なことを学びました。

私自身、子育てで行き詰まっても、話を聞いてくれる場所があることで本当に救われました。二人目が生まれ、上の子の赤ちゃん返りに、どうしていいか分からず、登米に帰ってすぐ支援センターに行くといつもと変わらず所長さんが「めいちゃん、お母さん、久しぶり、よく来たね！待ってたよー」と言ってくれ、その変わらない、温かい「よく来たね」にホッとして、うかつにも涙してしまいました。ホッとしました。帰ってきたなぁ、と。親戚の家のように温かくて安心する場所です。

引っ越してきた時は、全く居場所がなかった私を沢山の人と繋げてくれた娘と南方支援センターに感謝します。我が子、先生方、私をだんだんお母さんに育ててくれてありがとうございます。親子で泣いて笑ってまだまだ成長しますので、これからもよろしくお願いします。

遠藤 瑞生（宮城県）
南方子育て支援センター

だるまさんところんだ

子育て支援センターのイベントで、手作りのだるまさんと遊んでいるところです。お互いアウェイの地で子育て中。憩いの場が出来ました。子ども達も仲良く遊び、良い刺激を受けています。このような場所があって助かっています。

りく（宮崎県）
三股町子育て支援センター

ようこそ

「いいこね〜。はじめまして。ようこそつどいの広場へ。」

二橋有美子（千葉県）
新浜親子つどいの広場

大好き

結婚10年目。私たち夫婦の元に赤ちゃんがやって来ました。諦めていた赤ちゃん…でも諦めきれず自分も年も年なのでもう一度と思い不妊治療を再開して1年半の頃でした。私たち夫婦は泣いて喜び、なんとも言えない幸せを感じました。すぐ仕事を休業し家に閉じこもる様になりました。お腹の子どもを必ず産まなくては…と。次第に私の気持ちは不安と楽しみで、胎動を感じれば安心し、感じなければ不安になり、今思えば気が休まらない妊婦生活でした。

いよいよ出産！ 私たち夫婦の赤ちゃんがやっと見れて、抱けて、おっぱいをのませて幸せを感じました。

しかし退院して実家で育児を始めると辛い毎日の始まりでした。笑う事も無く、食べる気にもならず、私は何で出来ないの！ わが子も泣いてばかりで可愛くない！育てる自信がない！ 育児はこんなに辛いものなのと一日中泣いていた日もありました。授乳後の窒息が不安になり、私は寝てはダメ！ 赤ちゃんと二人で居るのは不安！授乳もこわい！ と思う様になり日中は車で白河市内を走り回ったりスーパーの駐車場に車を止め時間を潰したり、母親の職場へ行きミルクをのませてもらう日々が2か月位続きました。一日一日がとても長く感じていました。

産後うつ気味だったようで自宅に助産師さんや保健師さんが何度か来て話しをしたりしているなかで教えて頂いた……私の大切な場所！ 安心出来る場所！を見つける事が出来ました！それがたんぽぽサロンさんです！

行ける日は行くようになり、辛いって思っていた育児も楽しくなり、笑うようになりました。一日一日も早く感じ、たんぽぽサロンさんに行くのが楽しみになりました。スタッフの方や同じ子育て中のお母さん達と悩み事やいろいろな相談ができ、世間話をして笑ったり、みんなでお昼ご飯を食べたりと私はひとりじゃないんだ！と感じるようになりました。

友達も出来ました！

もしたんぽぽサロンさんを知らずにいたら私はどうなっていたかなと思うと……少しこわいです。たんぽぽサロンさんに行くようになって一年が過ぎましたが、ずっと行きたいと思います。みんなを笑顔にする場所、幸せを感じる場所、子育てを楽しいと思わせてくれる場所、それが私の大好きなたんぽぽサロンさんです！ 私に毎日が楽しい、わが子が可愛いと思うようにして下さり本当にありがとうございます！

寺内 由美子（福島県）
たんぽぽサロン

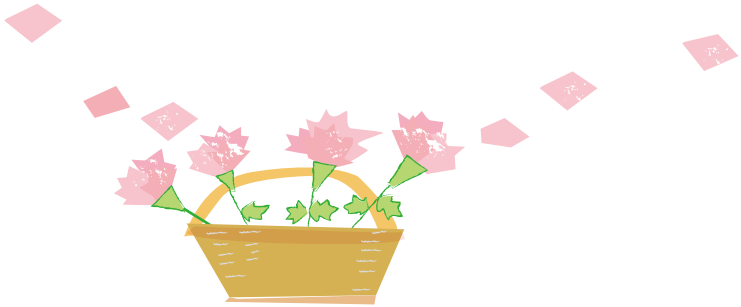
初めてのカーネーション

2年前の2月、私達家族は5か月の息子と共に引っ越しをした。私の実家から電車で10分程の馴染みのある場所だったが、知り合いはいない。息子は引っ越してすぐにずり這いをマスターし、家の中だけでは物足りなさそう。ちょうど暖かくなってきた4月頃、7か月になった息子と地域の支援センターにでかけてみた。

保育園に併設された子育て支援センター。初めて行くときは少し勇気がいった。「はじめての方?」と先生方が出迎えてくれた。初めて訪問した日、ちょうどお昼時だったからか人はまばら。あまり他のママたちと交流することもできず、私の支援センターデビューは終了。期待とは違ったものの、初めて見る場所やおもちゃに夢中の息子のため、また訪れてみようと思った。

5月の頭、ゴールデンウィークでおじいちゃんやおばあちゃんと会ったあとから甘えん坊になり、夜泣きも始まって私はヘトヘト。支援センターで相談できればと思い足を運んだ。

息子は人見知りもせず、楽しそうにおもちゃで遊んでくれた。ただ、私はなかなか他のママや先生方に自分から話しかけることができず、夜泣きのことも相談できなかった。



帰ろうとして先生に声をかけると、「あれ渡したかしら?」と引き止められた。「はいどうぞ、母の日のカーネーション。赤ちゃんの代わりに私たちから。いつもお疲れ様」手渡されたのは折り紙でできた一輪のカーネーション。まさかのプレゼントで、戸惑いながら受け取った。

母になって初めてもらったカーネーション。まさか自分がカーネーションをもらう立場になったとは。赤ちゃんの代わりにと言われたのがとても嬉しく、誇らしい気分で家に飾った。

それから支援センターに行くのが日々の楽しみになった。何度も通ううちに先生になんでも話せるようになり、話しやすいママ達も増えた。家族の他に息子の成長を見守ってくれる人達が増え、支援センターは子育ての味方になってくれた。

保育園に通いだしてからはあまり行けなくなってしまったが、育児に行き詰まったとき真っ先に相談できるのが支援センターの先生方。息子がもうすぐ3歳になる今もお世話になっている。

石橋 美里（埼玉県）
朝霞市　さくら子育て支援センター

双子育児を通じてもらった優しさ

結婚して初めての出産。大学卒業から途切れなく働いてきた私に与えられた産休、育休と言う名の余暇。両実家とも少しだけ距離があり、また両家とも親は働いていたために持て余す時間を楽しく潰すことができたのが子育て広場でした。

ママ友もでき、子育て広場の職員さんとも仲良くなり悩みながらも充実した子育て生活。

あっと言う間に復職、と思ったのも束の間でまたすぐに産休。二度目の出産では双子を授かり一気に三児の母となった私を助けてくれたのもこの子育て広場なのです。

双子を出産した病院では、「絶対に大変だから家族の人に助けてもらってね」と、実質主人しか頼ることのできない私にはプレッシャーの言葉。自分が倒れては子供たちがかわいそうと頑張らないように頑張ることに神経を使いながらの双子育児。長女にはどうしてもイライラをぶつけてしまったり、満足させてあげられないことばかり。首のすわらない双子を抱えて外出もできず、閉鎖感のある毎日。

そんな時、子育て広場で出会ったママ友たちが日替わりで会いに来てくれました。

親のヘルプがない現状を知ってお惣菜を作って持って来てくれたりもしました。また、子育て広場で私の噂をして、双子の誕生をみんなで喜んでくれていることも教えてもらいました。結婚してから引越して来た新しい町で、短期間でこんなにも友達に恵まれたのです。

一番嬉しかったのが、漸く外出しやすくなって子育て広場へ再び通い始めた時のことです。みんなが歓迎してくれたことはもちろん、離乳食の段階が進みお弁当を持って行くようになってからのこと。ご自身もお子さんが三人いらっしゃり、元保育士の職員さんがなんと双子のうちのどちらか一人にお弁当を食べさせてくれると申し出てくれたのです。ご自身のお子さんはもう大きいから、赤ちゃんのお世話ができることが嬉しいと喜んで手伝ってくれました。それからお弁当を持って行く度に日替わりで双子のどちらかの食事を担当してくれたのです。

双子の赤ちゃんのお世話は一冊の本にできるほど大変で、その時はただただありがたかったのですが、今になって思い返すとその優しさと配慮に涙がでます。そんな思い出の子育て広場も諸事情で今年の3月をもって閉まることになったと聞かされました。残念さよりも、開いていた時期に双子の子育てができて、たくさんの方の優しさに触れられたことに心から感謝しています。

さきあきあみ（大阪府）

みんなでお昼寝

お昼寝の時間なんて決まってないのに、みんな一緒にぐずりだしたと思ったらみんな一緒にお昼寝。おかげでママたちはゆっくりティータイムが楽しめたよ。ありがとう。

きち（兵庫県）
子育て交流の広場ほっぺ

笑顔もおなかもいっぱい

家での食事の時間はイライラ。こぼしたり、汚れたり、じっと座って食べられなかったり、あまり食べなかったり…

いつもなら『もう！！』と言ってしまう瞬間も、『うちも一緒だよ』『わかる！大変だよね』の一言がホッとする瞬間に変えてくれる。私と同じようにイライラしているお母さんがいたら、あのときの気持ちを思いだして声をかけてみよう。きっと、あたたかい気持ちに包まれた助け合いの輪が広がるから。

徳田 昌志子（香川県）
NPO 法人子育てネットひまわり　ひまわりはうすとことこ

引きこもりからの卒業

私は、日本を代表する引きこもりママです。ごく最近まで、2歳と3歳の二人の娘とともに、ほとんどの時間を家の中で過ごしていました。

長女には重い脳障害があり、歩くことはおろか、食べることもできません。呼吸さえも不安定で、起きているときには20分程度の間隔で、痰の吸引が必要です。長女にとっては、ただの風邪さえも命を脅かす存在になりかねません。そんな長女のハンデに起因する不安から、私は、子どもたちを連れて外に出ることに、とてつもなく大きな壁を感じていたのです。

ところが、そんな引きこもり代表の私たちを、子育て支援センターはあまりに自然に受け入れてくれました。家族そろって、初めて行ったとき、「車イスで行ったら迷惑かな」、「ハンデがある子が行く場所じゃないのかな」私の中ではネガティブな感情が渦巻いていました。ところが、いざ一歩踏み入れてみたら、ハンデさえもすーっと受け入れてくださって拍子抜け。子育て支援センターは、物理的にはもちろん、心理的にもバリアフリーな場所でした。

周りが自然に受け入れてくださったとき、どんなハンデも、その子の個性に変わると思います。家族も友達も一人もいない、縁もゆかりもない場所での子育てですが、二人の娘の個性を大切に育んでいきたいと思います。

そうだ！今日も一歩を踏み出そう。

みなみかぜ（茨城県）

親も子も成長できる場

息子は初めて訪れた子育てひろばに目を輝かせた。人見知りしない方だったが、私を振り返ることなく、ひろばの中心へ走っていき遊び始めた。なかなか遊びの輪に入れないわが子に優しく話しかけるママを見ると羨ましく思えた。物怖じせずその場に溶け込める子どもだと親は楽だが、置いてけぼりを喰らったような気になり、「自分は必要なのか」と愚問を巡らせたりもした。

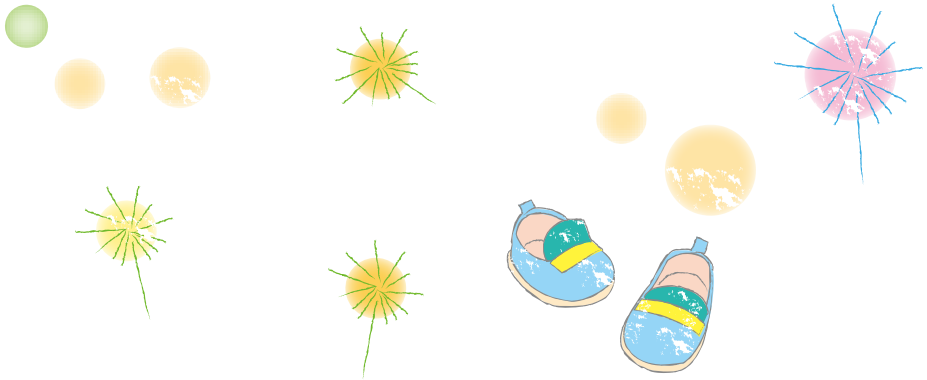
よく行く子育てひろばでは月に一回、一時保育を行っている。ママの心のリフレッシュと、ママと離れることで得られる子どもの心の成長を応援してくれるもので、息子が2歳になった頃、この一時保育に申し込んだ。職員さんから「最初は泣きますが、すぐに泣き止んでお友達と遊ぶので心配ないですよ」と言われたが、私はちっとも心配ではなかった。息子はきっと私の足元からパーッと走って行ってしまうだろう。

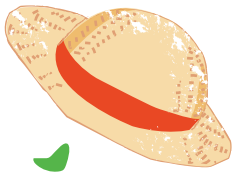
当日、ひろばへ着くといつも通り遊び始めた息子に私は「あとで迎えに来るからお友達と仲良くね」と声をかけた。一瞬私を見たが何も言わずに遊び続ける息子に分かっていても少し寂しい気持ちになった。しかし、ひろばを出ようとした時「待ってー！」と息子が泣きながら追いかけてきたのだ。ひろばを出ても泣き声は聞こえ続け、初めての息子の様子に戸惑い、「本当に預けて良かったのか」と、お迎えの時間まで何も手につかなかった。

恐る恐る迎えにいくと、息子はお友達と楽しそうに遊んでおり、私を見つけると「かあちゃま！」と笑顔で走り寄ってきた。離れても必ず戻ってくる、と子どもに話すことが大切だと職員さんから説明されていたのだが、その通り、息子は私が迎えに来るのを信じて待ってくれていたのだ。「電車で遊んだよ」「おにぎり残しちゃった」と一生懸命話す息子がたまらなく愛おしく、ぎゅうっと抱きしめた。

時間になると必ずママが迎えに来る。この安心感があるからこそ、子どもは思いっきり遊ぶことができる。あの日、私を振り返ることなく走っていった息子には、ママはいつも見守ってくれている、という確信があったのだと気付くことができた。ひろばの一時保育は、子どもだけでなく親の私の心も成長させてくれた。

小倉真由（大阪府）





ミニトマトの思い出

今年も暑い夏がやってきた。ひろばの畑の夏野菜がぐんぐん育っている。草取り、水まきをしながら目に入る真っ赤なミニトマト。見るたびに思い出す数年前の夏の出来事。

当時、私はひろばの利用者だった。息子は明らかに他の子より発達が遅れていた。こだわりが強い、癇癪がひどい、お友達と関わりが出来ない。気が付けば私の口癖は「すいません」になっていた。

上の子の時は、「子どものしたことですから、気にしないでください」なんて言っていた。あの頃が懐かしい。

癇癪が収まらない息子を抱えて車に押し込み、車内で親子で号泣することも度々。それでも家に居ればテレビばかり。動きが大きい子が家にいられるわけがなく、意を決して「ひろば」に行く。出来るだけお友達や他のママから離れた場所で、迷惑を掛けないように気を張りながらすごしていた。

ひろばの先生方は上の子の時からお世話になっていて、色々と親身になってくれた。ただ、心が縮こまっていた私は「この苦しみは、誰もわかってくれない」と殻に閉じこもっていた。味覚も過敏な我が子は、当時食べられるものがほとんどなかった。ひろばでモリモリとお弁当を食べる子たちが心底羨ましかった。

ある日、畑に行こうと先生に誘われて、珍しくついていく息子。畑には夏野菜が沢山なっていた。先生が「食べてごらん、美味しいよ」そこには赤々とはじけるようなミニトマト。慌てて、「うちの子は野菜がムリで…」と言いかけて「あれ？」トマトをかじっている息子を見て目がテンに。その状況にしばらく言葉がでなかった。

「トマト、美味しいね～」と、のんびり話す先生。私も、少しして、だんだん嬉しさがこみあげてくる。「トマト、食べたね、すごいね！」涙声の私を見て、初めて食べるトマトの味を確かめながら、息子は少し笑った。

思えば、私は息子の「出来ないこと」に悩んでばかりいた。出来た喜びを子どもと一緒に心から喜ぶこと。そういった機会がもっとあったかもしれない。私に叱られてばかりいた息子の事を思うと心がぎゅっと痛む。

ひろばには、色々な悩みを抱えた保護者が沢山来る。私には大したことは出来ないが、ひろばに来た方達がお子さんの「出来た！」を沢山感じらるように少しでも笑顔になったり、ホッと出来るような居場所つくりのお手伝いが出来たらいいなと思う。

田辺エミ（静岡県）
掛川市倉真「パンダひろば」

ママのためのひろば「子育て応援ひろば ふぅ」

子育て応援ひろば ふぅ は、ねんねの赤ちゃん親子の利用も多く、おんぶ未経験のママも珍しくありません。「どうすればいいかわからないし、ひとりじゃ怖くて」というママに、先輩ママからおんぶのコツを教えてもらいました。「これで家事がしやすくなるぅ♪」と喜ぶママ。「両手が空くっていいなぁ〜、今度私も教えて！」と見ているママからリクエストもあったり。“ママのためのひろば”ならではの光景です。

折笠 友子（新潟県）
認定 NPO 法人マミーズ・ネット　子育て応援ひろば ふぅ

よしよし

赤ちゃんのママがちょっと離れたら、とことことやって来た一人っ子の男の子。突然ごろんと隣にねんねして、「よしよし」ってはじめました。誰も教えてないのにすごいね。ちゃんと見てたんだね。感じてたんだね。周りの大人たちみんなで思わずニコニコって笑いました。

クローバー（福島県）
たんぽぽサロン

涙×2〜私はダメママ〜

10年前、私がまだ新米ママだった頃の話です。私は実家で1年間子育てをした後、親元を離れて知らない土地に引っ越しました。主人がいない昼間は会話もできない1歳の息子とふたり。孤独でした。私は子育てに自信が持てなくて、他のママたちがみんな立派に思えて、どんどんどんどん追い込まれていました。

そんな時通い始めたのが子育てひろばです。ひろばのスタッフと雑談をするだけでも、なんだかほっとしました。他のママたちともおしゃべりしました。でも、彼女たちはすごくて、自分はダメママだという思いは募るばかりでした。私は劣等感の塊なのです。

そんな中、私は大人になって初めて、公の場で脇目もふらずに大泣きしました。スタッフの方と話していると、ダムが決壊したみたいに、たまっていたものが全部流れ出してしまったのです。スタッフはそっと事務室に案内してくれて、私が落ち着くまで優しく話を聞いてくれました。私はすっかり甘えていました。本当に困ったママです。

息子が幼稚園に通うようになった頃、私は再び事務室で泣いていました。幼稚園になんとなく馴染めずにいたのです。周りはいい人ばかりでママ友もいっぱいできました。それなのに…。私は確かにママ友の輪の中にいるのに、輪の中にいないような孤独感。私だけ置いていかれているかのような不安。本当に弱い心の持ち主です。そんなどうしようもない私を、ひろばは再び優しく包み込んでくれました。

あれから10年、私はまた小さな命を授かりました。そして、また、ひろばに通い始めましたが、もう泣くことはありません。たくさんの人に支えられながら、なんとかここまでママを続けてこれたから。だから私は大丈夫。ただただ不安だったあの頃の私に教えてあげたいです。私は立派なママじゃないけれど、素敵なお兄ちゃんになった11歳の息子が、こうして今、私のとなりで笑ってくれています。

ゆうくんママ（東京都）

Y君のおばあちゃんと子育て支援

Wさんは、いつもY君というお孫さんを連れて、子育て支援センターに遊びに来る。気さくな人で、自分から周りの母親によく声をかけてくれている。Wさんの周りはいつもお話の花が咲いている。親子ほど年が違う母親ともおしゃべりを楽しんでいる。その姿には「子育ての大先輩」という上から目線が全くない。

それに反して、孫のY君はいつも緊張して表情が硬い。例えば、私たちは、Wさんが帰る時に、両手を出して、「はい、タッチ！」とY君に声をかけてスキンシップを試みる。しかし、Y君はなかなかてごわい。引っ込み思案なのである。Wさんは、一週間のうち、三、四日ほど手作りの弁当を持参してセンターで過ごしていく。そうなると、よく会う親子と仲良くなっていく。すると、Y君に変化が表れ始めた。A君と遊ぶのが楽しくて追いかけあい、喧嘩やおもちゃの取り合い、ときには見つめあって話しあっている姿が増えてきた。

Y君の好奇心や積極性が刺激されて、難関だったおむつ外しが進んでいく。帰宅する時Wさんは、「今日は、センターのトイレでおしっこができたの！」と報告してくれる。私たちは、全員で拍手！ パチパチで大喜びする。Y君は、はにかんだような嬉しそうな顔を見せた。一歩一歩ゆっくりと成長しているY君を見ると、私も孫ができたらこんな孫育てがしてみたいと心から思うのだ。

そんな、Y君は幼稚園へ行き、仲良しだったA君は、滋賀県へ引っ越しが決まり、お別れの日がやってきた。Wさんは、涙を流し、A君のお母さんは、必死に涙をこらえている。対象的な二人。また、Y君は、Wさんの横で悲しそうな表情。A君は、「Y君バイバイ、Y君バイバイ」と車に乗るまで叫び続けていた。見ている私たちも涙せずにはいられない場面であった。

このようにして、センターへ来る親子は、個々に来る人がほとんどである。点だった親子が線となってつながる親子たちへ。子育て支援の重要な役割の一つは孤立している家族の子育てを支えることである。Wさんは、まさに、当事者として親子たちの繋がりを紡いでくれた人であった。

センターでは、今日も新しい親子がドキドキしながら「あのー、初めてきたのですが・・・」と勇気を振り絞ってやってくる。私たち指導員の専門性は、寄り添うや労う、励ます姿勢を持ち、いつ何時でも親子と目線を一緒に子育てを応援することが求められている。

山崎 千秋（兵庫県）
伊丹市子育て支援センターむっくむっくルーム

子育て支援センター

もう二度と行きたくない。

子育て支援センターに初めて行った日そう思った。

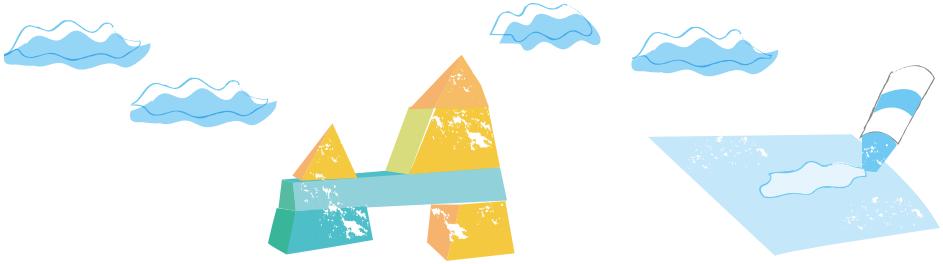
初めての土地、初めての子育て、市のホームページなどを参考に、支援センターの情報を得た。もともと、家に引きこもっていられない行動派なので、子育ての生活リズムに慣れてきた、生後4か月になって足を運んでみた。しかし、期待とは全然違い、すでにママさん達のグループはできていて、話しかけづらい雰囲気だった。それでも日にちを変えれば、また違った雰囲気かもしれないと、変な期待をして通ってみることにした。私自身は、つまらなかった。気の合う人もいないし、たかが子どもの年齢が同じ位なだけで、何してるんだろと思った。しかし、それとは対照的に子どもは、周りの刺激を受けて、ハイハイを全くする気にもなっていなかったのがするようになってみたり、家で一人でみてるより、成長していた。もともと私自身が一匹狼タイプなこともあり、子どものためと割り切って、通い続けていた。そうしていると嫌なことばかりでもなく、気の合う人も現れてくるものである。私と同じように感じた人もたくさんいたのだった。共感されると精神的にも楽になり、支援センターに通うことも苦痛ではなくなった。

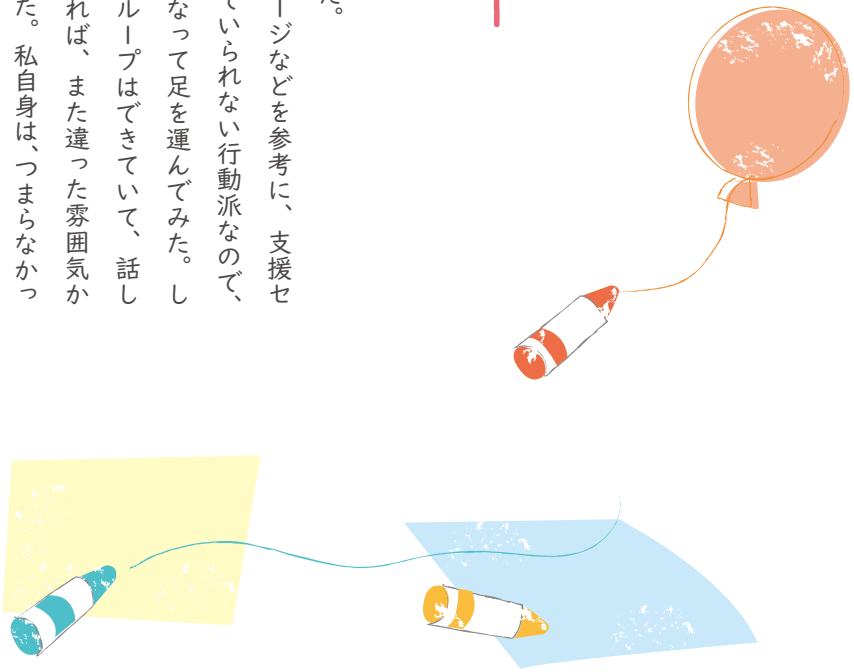
十人十色だから、色んなタイプの人間がいるものだと学ぶこともでき、人間観察も楽しめるようになった。

子どももどんどん成長して、歩き初めて靴を履いてくれない、離乳食を食べないなど悩みを相談して、アドバイスをもらえるママ友もできた。子ども自身お片づけの仕方、友達との関わりを身につけて行き、家に引きこもって一人でみるより、色んな事を感じたり体験できると思った。

二人目が産まれて、半年、また、小さな発見を探しに足を運んで行こうと思う。

村上 由香里（広島県）





パパと小麦粉粘土

月一回の「お父さんの時間」。パパと小麦粉粘土をこねこね。
「おててが真っ白になっちゃった！」初めての感触に子どもはにこにこ。
一緒に笑ってパパ同士のつながりもできたら最高ですね！

さとちゃん（埼玉県）
地域子育て支援センターるーえん

小さなお母さん

毎週水・金曜日は、支援センターでわらべうたを親子と楽しんでいます。

この日は金曜日で、０歳児対象の日。10か月の男の子と３歳のお姉ちゃんが一緒に遊びにきました。おしゃべりが大好きでわらべうたもベテランのおませさんです。ままごとのエプロンをつけて小さなお母さんになり、自然と弟の体をなでながらわらべうたをうたっていました。かわいい姿に周りがほっこりとした気分になりました。

白石 公子（愛知県）
レイモンド庄中子育て支援センター

子育て支援センターは親子が元気になれる場

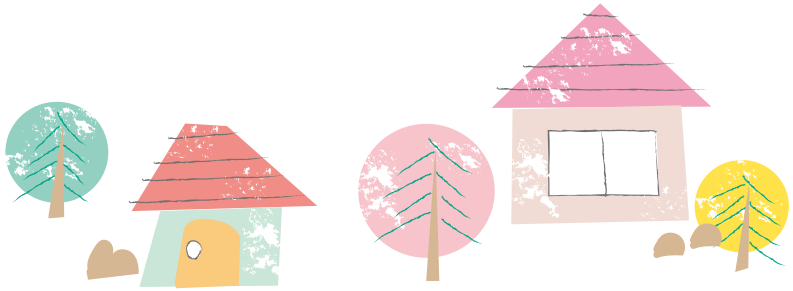
私は、仕事が休みの日、子どもを連れて桐生市が運営している子育て支援センター（以下センターと略す）によくでかけます。センターは、無料で遊具が豊富に揃っており、屋内にあるため天候や気候を気にせず、いつでも出掛けることができます。突然、時間ができた時、子どもとどう有意義な時間を過ごそうか迷ったら、とりあえずセンターに出掛ければ間違いありません。子どもは、他の子と遊んで楽しい時間を過ごせるだけではなく、交代で玩具を使ったり等、社会性を学ぶこともできます。

また、それと同等か、いやそれ以上に親にもたくさんのメリットがあります。私はパパなのでママ達のようにパパ友を作ったり、そういった場もありません。まして桐生市は生まれ育った地ではないため、身近に子育てのことで気軽に話せる人がいません。しかし、子育ては不安や分からないことが多く、誰かとつながりたいと思っていたので、センターで会うママ（パパはほとんどいないため）との情報交換は、とても貴重なものでした。

当初、男性の私が、ママと話ができるのか不安でしたが、そこは子どもが持つ不思議な力で、初対面の人とも「何歳ですか？」「夜はよく寝ますか？」「ご飯の好き嫌いはありませんか？」などすぐに会話ができました。全く見ず知らずの大人同士を瞬間的に近づけてしまう子どもの偉大さを感じずにはいられませんでした。また、センターに常駐している保育士の方が、パパである私にもママと分け隔てなく、いつも明るく声をかけていただき元気をもらっていました。

子育ては一人ではできません。誰かと協力しあったり、励まし合ったりしなければいつか子育てに煮詰まってしまうと思います。そんな私たち親にとって、気軽に利用できるセンターは、地域になくてはならない場であると思います。これからも、センターを利用できることに感謝をしつつ、子育てを楽しんでいきたいです。

おおやん（群馬県）
桐生市子育て支援センター



息子と向き合う

私にとって、子育てひろばは息子と向き合える場所です。

結婚してから自分の実家は簡単に行き来できる場所ではなくなりました。主人は家に帰ればすぐ育児を手伝ってくれますが、私ともうすぐ二歳になる息子の二人きりで一日の大半を過ごさなければいけません。元々息子と二人きりは楽しい時間が多かったのですが、息子は一歳を過ぎたあたりから、自分の思い通りにいかないことがあれば癇癪を起こし、物を投げたり、叩かれたり、噛んできたりすることが増え始めました。主人が仕事の間は車が使えず、歩いて行ける範囲には公園もありません。息子と家に二人でいると、いたずらも増え、息子のダメなところが目について、つい叱ってしまう場面が増えていました。私が叱ると、息子は泣いて手が付けられなくなります。「なんで私はこんなに泣かれてまで叱らないといけないんだろう」と私自身も泣きたくなっていました。二人きりの時間が苦痛になりはじめた頃、歩いて行ける範囲内に子育てひろばがあることを知りました。

行ってみると、同じように核家族で子育てをしているお母さんたちがたくさんいて、子供たちの遊びを見守りながら、親同士で悩みを相談し合える場所でした。

ひろばに行き始めて驚いたのは、他のお母さんたちに言われて自分の子供の成長を知れたことです。「前会った時より背が伸びてきたね」「最近おもちゃを譲ってくれるようになったよ」なんて言われて、よくよく息子を見ると、昨日できなかったことが今日はできるようになっていたということが分かるようになってきました。

思い返せば家に二人きりでいた時は、知らず知らずのうちに私が息子に合わせて、少しでも泣かれないように、怒らせないように行動していたような気がします。でも、子育てひろばに来ると、おもちゃを取り合ったり、叩き合ったり。肝が冷えることもありますが、子供同士にしかできない遊び方をしています。そしてその中で、息子もお友達との接し方の勉強をしていたのです。一番近くで息子の成長を見守ることができる、こんな当たり前のことをひろばに来るまで忘れていました。これから小学生になり、中学生になり、息子の成長を逐一確認することが私にはできなくなっていきます。一瞬一瞬変わっていく息子の成長を知ることができるのは、今だけ。私にとって子育てひろばは、子どもと安心して過ごせる大切な場所になっています。

けいちゃんのママ（香川県）
ひまわりはうすとことこ

わたしと家族の大切な居場所
きらりんきっず

私と「おやこの広場きらりんきっず」との出会いは２０１０年７月。陸前高田市の駅前大通り商店街内に広場が開所した時に、当時１歳の長男を連れ、ドキドキしながら足を運んだのがきっかけでした。

私は隣の宮城県から嫁いできましたが、好きな人と結婚して過ごす時間より、半同居の生活で義父母との生活時間が多く、生活スタイルのギャップにとまどい、毎日子供と行き場を探していました。しかし土地勘もなく、知り合いがいるわけでもなく、毎日会話するのが義父母だけの生活が続き、私は一人取り残されたような気持ちでいました。

そんな時に出会ったのがきらりんきっずでした。

いつもスタッフの方が笑顔で出迎えてくれ、温かく目配りをし、声をかけてくれたので、自分が自然体でいられ、周りのママたちとすぐ打ち解けたのを今も覚えています。何よりもスタッフの方が子供の日々の成長や嬉しい変化に気づいてくれ、喜びを一緒に話せる相手ができたことが私にとって心が安らぐ居場所となりました。

それから８か月後。東日本大震災により我が家もきらりんきっずも全壊しました。私は家族と離れて実家に半年ほど避難して過ごしました。周囲は慌ただしいのに子育てをしていると何も力になれない不甲斐ない自分を責めつつ、悲しい現実だが子供にはせめて毎日笑顔で過ごさせたい。そんな思いで途方に暮れていた震災１か月後。高田のママ友から「きらりんきっずが避難所の一角で始まるよ」と嬉しい連絡が入り、みんなの顔が見たく、震災で荒れはてた道を３時間かけて向かいました。図書館の一角に開所した広場に入った瞬間、すっぴんにマスク姿の先生方やママたちの顔を見て安心したのと同時に、子供が穏やかな表情でお友達と遊び始めたことに安堵し涙がこぼれました。大変な時だからこそ開所をというきらりんきっずの思いに、私の心が救われた瞬間でした。

あれから６年。私は三児の母となり、利用者でもあり、きらりんきっずスタッフとして働いています。スタッフになり感じたことは、いつも利用者さんと同じ目線で物事を考えられ、様々な事業に取り組めるのは、スタッフ全員が成功や失敗の育児経験者・母という当事者目線がすごくいい影響で活かされていると感じます。いつも明るくウエルカムな広場「きらりんきっず」は、ママたちにとってかけがえのない寄り添える場所で、地域に根付き親子の笑顔をつなぐ架け橋になっています。

菅野 あゆみ（岩手県）
おやこの広場きらりんきっず

親子で流しそうめん

シニアボランティアスタッフお手製の流しそうめんの設備で開催しました。

あまりの人気に夏休み中に数回開催することとなり、その後、毎年親子のみなさんのリクエストにより皆さんが楽しみにしている行事の一つになっています。

そうめんの他にプチママン菜園でとれた夏野菜を一緒に食べるイベントで、食育にもなっていてお母さんたちにも喜ばれています。

たっちゃん（福島県）
NPO 法人子育て支援コミュニティ プチママン

こころのサプリメント

熊本地震後、２回目の夏。まだまだ復興途上で、近くのプールは閉鎖されていました。それでもこの酷暑にお水遊びをさせてやりたいと、子育て支援センターの先生に尋ねたら、定期的にプールができるとのこと。子どもたちがお友だちと楽しそうに遊ぶ姿にママ達もニコニコ。他愛のない世間話も弾みます。そんなときの一枚です。子育て支援センターで遊ぶ子どもたちの笑顔と、そこでできたつながりにいつも癒やされています。

さくら（熊本県）

福島の大切な場所

私には今、子育てを一緒に楽しみ、思いを共有できる仲間がいる。

七年前には、まだ名前も知らず、もしかしたら出会っていなかったかもしれないのだが、みんな福島で暮らしていた。しかし、東日本大震災という大きな災害で、福島はバラバラになった。

そして震災から四年目の春、子育て支援センターみんなの家@ふくしまという場所で、私達は出会った。「はじめまして」いろいろな思いを抱えていたためだろうか、そんな一言もちょっぴりぎこちなかったような気がする。あの頃から支援センターはたくさんあったが、会話の中で避難していたこと、福島にとどまったこと、もちろんそれぞれの理由があるのはわかっていたが、どこへ行っても、互いが傷つけ合わないよう話していた。

ある日、福島にとどまった私と、一時避難することを選び帰還したママで、じっくり話す機会があった。もう震災から何年も経っていたはずなのに、心の中にそっとしまっておいたモヤモヤしていたものが、あふれ出すかのように言葉に変わった。本当は、みんな言葉にしたかったのかもしれない。福島にとどまることを選んだ親子も、避難することを選んだ親子も、親として子どものことを思い、家族としてそれぞれの決断をしたのだ。どちらが正解でもなく、したくてもできなかったり、せざるを得なかったのかもしれない。本当は、心の垣根などなかったのだ。みんなの家は、あえて福島の抱える問題に切り込み、親としての私達に向き合ってくれている。こんな風に心の垣根を作らず話せる支援センターが、福島にはこれからも必要である。

バラバラだった私達も、今では子育てを互いに楽しみながら、ボランティアとして、福島に住む親子を支援する仲間となった。そんな仲間に出会え、話ができるみんなの家は、私達福島の親子にとって大切な場所である。

熊谷 みき（福島県）
子育て支援センターみんなの家@ふくしま

思いが形に変わる時

広場に勤務して5か月…。たくさんの親子と出会う中で、ふと自分の子育てを振り返ってみる。

私には四人の子どもがいる。長女、次女、長男、三女。長女と三女は6歳差、つまり6年間で四人の子を生み育ててきたのだ!! と同時に、その激動の6年間が思い出される。上の二人は年子、長男は先天性の病気があり、三女は早産と常にバタバタしていた。

下の二人はNICUに入り、その時は特に心身ともに疲れていた。「赤ちゃん、元気に生まれたよ!」と胸を張って言える訳もなく、ただただ搾乳をしてNICUへ母乳を届けるという毎日だった。もちろん上の子のお世話も休めない。この状況、誰が分かってくれる? いつまで続くの? そんな不安さえも口にできずにいた。

数か月後に退院したものの、経管栄養を続けていく長男。常に医療ケアが伴った。今はそんな長男も幼稚園年長になり、早産だった三女も今年3歳になる。この時の思いを、今、広場スタッフとしてどうにか生かせないか。そう思った時に、他の子育て支援拠点でNICU親子を支援するグループがあるのを知った。「まさにこれだ!」と思った。

この時からいてもたってもいられず、すぐに「こんな活動がしたい」と同僚や上司に申し出た。みんな応援してくれた。

思いが形になってゆく。これからどんなふうに活動が展開していくかは分からない。今からみんなでつくりあげていくのだから!

来週、まさに第一回目のNICUファミリーグループが始動する。ゆっくりと自分のペースで成長してきた長男・三女のように、この活動も急がず焦らず、温かく見守り、育てていきたい。

齋藤 啓子（香川県）
NPO法人子育てネットくすくす　子育て広場くすくす

先は見ない。今をみつめる。

私には2歳の息子がいます。出産予定は5月でしたが3月に出産。2か月の早産で出生体重1256グラムと未熟児でした。この子にとってこれから、ハンデを乗り越えて周りの子達についていってくれるかを思い不安な日々でした。

ある支援センターで幼児教室があると聞き、入園前に同じ学年となる子達と接する良い機会と思い申し込みました。この頃は、息子にとって周りの子達と遊ぶことよりも自分の興味のある遊びに夢中で誰かに合わせてという事は難しい時期でした。幼児教室へ行ってもなかなか内容に沿った動きが出来ず、ついには一度も部屋にすら入らないこともありました。どうしてもっと、みんなと遊んでくれないんだろう。なんでうちの子だけ他の子と違うんだろう。未熟児出産だったから周りとついていけないのか。そんなことばかり考えてしまい、悲しい気持ちになりました。息子が周りからどんな目で見られているのか気になり恥ずかしさもあってか、部屋から出たところでとうとう、私は涙が出てしまいました。

そんな私を見て、息子は心配そうに近寄り頭を撫でてくれました。こんな優しい子なのに、どうしても周りと比べてしまう事にも自分に腹が立ち、涙が止まりませんでした。

先生がその姿を見て、優しい笑顔で話かけてくれました。「大丈夫。周りの子達の声を聞いたり音楽が聞こえるだけでもいい刺激になるのよ。ママ、大変で辛いのに頑張ってるね。辛くて家から出れずに悲しい思いをしてるママもいるの。でも息子さんのことを考えて、こうやって外に連れて来てくれて先生嬉しいわ。頑張ってるね。えらいね。」

それを聞くと今までの私を認められている気がしてほっと安心できました。嬉しさがつのり、また涙が出てしまいました。いつからだろうか…息子と周りを比べてしまうようになったのは。周りを気にしすぎて、どんどん窮屈にしているのは息子の行動や気持ちではなく、自分自身だったという事に初めて気付きました。未熟児出産のことをいつまでも気にして、息子に頑張って欲しいと、そんな事ばかり考えてしまっていました。笑顔でいてくれればそれでいい。私が見失っていた大切なものを見つける事ができました。

「来週も絶対来てね。約束よ。」先生は続けてそう言いました。私は「はい」と答えました。いつまでも、先ばかり考えて不安になるのはもう止めよう。私にとって子育て支援センターは、私という未熟者な母親も優しく認めて見守ってくれる存在です。

石綿 亜梨沙（山梨県）
地域子育て支援センターあっぷっぷ

中学生と乳幼児親子のふれあい体験授業

中学生は実際に赤ちゃんを抱っこしたり一緒に遊んだりする中で、お母さんたちから日頃の様子や我が子への思いを聞いたりします。

ドキドキするけど「かわいい。やわらかい (*^^*)」ととても優しくかかわる中学生たち。

お母さんたちは普段かかわりの少ない中学生と触れ合う中で将来の我が子の姿を想像する貴重な機会にもなっています。

江口 幸代（香川県）
NPO 法人子育てネットくすくす　子育て広場くすくす

いつの間にかお姉ちゃんに。

赤ちゃんが大好きな長女。初めてわくわくるーむに行った時は抱っこされる側だったけど、今では抱っこする側に。わくわくるーむで赤ちゃんとたくさん出会えて抱っこ出来る事が楽しみなようです。

Anne（岡山県）
備前市地域子育て支援拠点「わくわくるーむ」

おもちゃをのせて…あたたかいつながりが生まれるひろばへ

私は、車におもちゃを乗せて、常設のひろばがない郊外の地域に出向く「移動子育てひろば」のスタッフをしています。

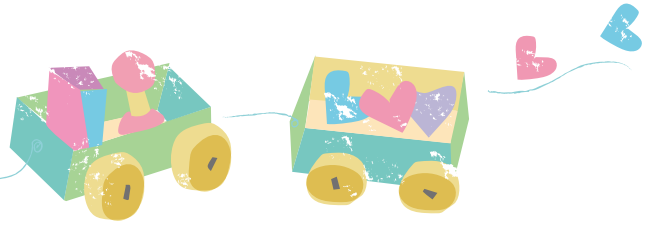
その地域は、みんなで子どもの成長を見守っていると感じる温かな雰囲気の場所。しかし同時に「地域の中で子育て中の仲間を見つける」ということがなかなか難しい場所でもあります。ひろばを利用する方の年齢層も幅広く、孫育てをしているおじいちゃんおばあちゃん、10代のママ、アウェイ育児をしている人、ずっと地元に住んでいる人…と様々です。そんなひろばであった「人と人とのつながり」を紹介します。

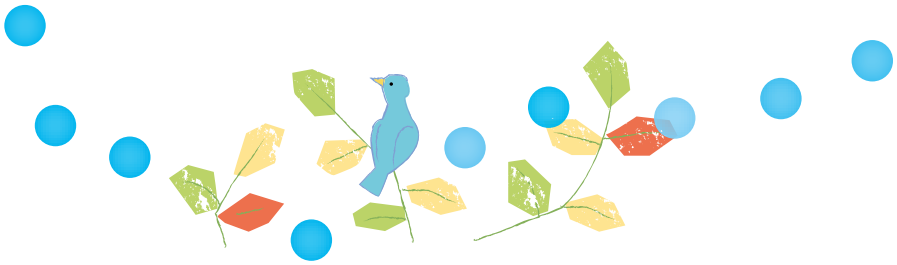
ある地元出身の利用者さん。二人のお子さんを育てる先輩ママです。そんな彼女はいつも、地域外から嫁いできて第一子を出産したばかりの利用者さんに、温かく声をかけていました。私たちが出向く「移動子育てひろば」は週に一度しか開設されないこともあり、「毎日やっている子育てひろばもあるんだよ」という情報も伝えてくれていたようです。しかし、第一子を出産したばかりの彼女は、まだ子どもが小さいことや自分の体力などを心配し、他の場所へ行くことにまだまだ不安があるようでした。そんな気持ちを察した先輩ママは「今度一緒に行ってみようよ」と声をかけ、一緒に行ってくれたのです。それをきっかけに自信がついたのか、その後は一人でも出かけるようになり、私たちのひろばでも生き生きとした表情で過ごされるようになりました。

そして、それから1年後。不安そうだった彼女も第二子を出産し、先輩ママとなりました。今ではひろばに来る新米ママさんに自分から声をかけ、ひろばのアットホームな雰囲気を作ってくれています。最初に彼女に声をかけてくれた利用者さんもまた、自信がついた彼女の姿を頼もしく見守ってくれています。

子どもの少ない地域での、週一回の開催。利用者数こそ少ないですが、だからこそ、ひろばで会うたびに「こんなこともできるようになったんだね！」とみんなで子どもの成長を喜び、声をかけあったり励ましあったりする利用者さんたち。そんな彼女たちの姿に、いつもスタッフの私があたたかな気持ちになります。そして、このような「移動子育てひろば」ならではの親子のつながりを、これからもスタッフとして支えていけたらと思います。

よしぽん（新潟県）
こどもセンター「移動子育てひろば」





金曜日のお兄さん

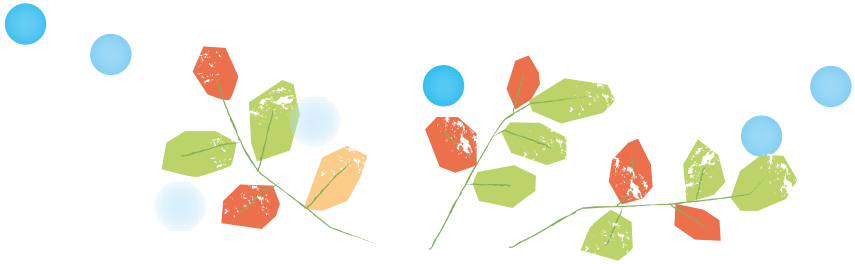
私の住んでいる地域は子育て支援が充実していて、3歳の娘と出かけるのが毎日の楽しみです。

なかでも、福祉施設内の体育館を貸し切って思い切り走り回って遊ぶことができる金曜日は娘が大好きな時間です。別の部屋では、障がいのある方が集まって活動しています。朝、そこの玄関には、20代くらいのお兄さんがいつも立っています。障がいがあるため、人とコミュニケーションがうまくとれないようで、無表情で、うつむいて座っていたり、ずっと一人で喋っていたりしていました。

「おはよう」とあいさつしても返事がないのは仕方がないこと。娘は「どうしてお兄さんお話しないの?」と私に聞きます。「お母さんもよくわからないのだけど、お兄さんはね、障がいといって、人とお話をしたくてもうまくできないんだと思うよ」と話すと娘は「そうなんだね」といいました。

私達は毎週お兄さんに会うたびに「おはよう」とあいさつをしました。

何か月か経ったある日、私達が「お兄さん、おはよう」とあいさつをしたら、



お兄さんが私達の顔をパッと見ました。娘が「あっ、お兄さん、こっち見た!」と嬉しそうに言いました。

翌週も私達があいさつをすると、今度はお兄さんが手をふってくれました。娘は「お兄さんに通じたね!」と喜びました。それから金曜日の朝は「きょうもお兄さんいるかなあ?」と娘と話しながら向かうようになりました。

お兄さんは私達のことをしっかり覚えていてくれていました。そして、無表情ですが、優しいまなざしをしっかりと私達へ向けてくれるようになりました。今ではお兄さんに会えることが楽しみになり、「お兄さん嬉しそうだったね」「お兄さん、本当はもっとおしゃべりしたいんじゃないかなあ」「今度はお名前おしえてあげようか?」と、お兄さんの小さな変化を共に喜び、お兄さんについてたくさん話すようになりました。

「おはよう」といったら「おはよう」、それだけじゃないんだよ、いろんな「おはよう」があることを教えてもらえたこと、お兄さんとの出会いに感謝しています。

佐藤 里枝（岩手県）

孤独な暗闇のトンネルの向こうに

私は、第二子長女を出産後、上の子の長男2歳がいわゆる赤ちゃん返りとイヤイヤ期で手に負えなくなり、頭を抱えていました。うわさには聞いていたけれど、想像以上で動揺しました。首が座っていない娘を放って、泣きじゃくる息子をおんぶ・抱っこする機会が増えました。また、里帰り中は室内遊びだったので、外遊びが大好きな息子は退屈なようでした。しかし、猛暑の中小さい娘を連れて公園などの外出は困難でした。どうしたらいいか悩んでいると、ふと産院で貰った市内の子育て支援のパンフレットを思い出し、つどいの広場「このゆびとまれ」に行き相談してみようと決意しました。

緊張しながら玄関の戸を開けてみるとスタッフの方が笑顔で挨拶し、迎えてくれ安心しました。息子は、絵本やおもちゃ遊び、お外遊び、夏はプール遊び等をするとすっかり赤ちゃん返りはなくなりました。たくさん一緒に遊ぶことで心と身体の不調はなくなったようでした。これで、子どもの問題は解決しました。

今度は自分自身の問題です。二児のママとなり、育児を楽しみたい、笑顔で子どもと接したい気持ちの一方で、睡眠不足、家事が進まない、時間に追われ些細なことで苛立ってしまう、その苛立ちを子どもにぶつけてしまう、そんな怖いママになり自己嫌悪をするようになっていました。主人は家事や育児には協力的で助かることもありましたが、休日出勤や帰宅が遅いことも多く、子どもが起きてから寝るまで丸一日一人きりで子どもと向き合う時間が苦痛に感じることもありました。

一体、他のママさん達はどの様にして育児を楽しんでいるのか？ストレスの対処、解消方法は何だろう？と思い、月に一回開催される、『子どもの暮らしと遊びの座談会』に参加しました。この時、私は先ほどの現状を告白しました。目頭と声が潤んでしまい、羞恥心がありましたが、次から次へと言葉が出てきました。ママさんからは「お互い辛いよね」「大変だよね」と共感の言葉があり、スタッフさんから育児は一人じゃない、色んな人に頼っていいんだよ、など沢山のアドバイスがありました。想いを伝えると心がすっと軽くなり、孤独な暗闇のトンネルから抜け出した気分でした。あの時、勇気を出して良かったです。今、私は心穏やかに子育てを楽しんで笑顔で過ごしています。

どんぐり坊や（福岡県）
つどいの広場「このゆびとまれ」

なんで知ってるの ?!

幼稚園に通い始めたこともあり久しぶりに「ひろば」に遊びに来たあーちゃんを先頭に、なぜかみんなで「前へならえ ?!」。後ろの３人はまだ幼稚園にも保育園にも通っていないのに「なんで知ってるの ?!」とママたち。不思議ですね。

（ちなみにこの４人は､たまたま「ひろば」に居合わせた４人です。ママたちも子どものおかげで急に会話が弾みました。あ！ママと来たのは２人。あとはパパ、おじいちゃんと一緒に来たのでした。）

あこ（福島県）
NPO 法人しらかわ市民活動支援会　おひさまひろば

年子の二児の母

私はウクライナ人です。日本に14 年住んでいて子供が２人います。長女とよく子育て支援センターに出かけていました。祖国から遠く離れた日本は文化の違いもあるし子育て未熟な私は不安だらけでした。そこでバディプロジェクトの子育てサポーター養成講座に出会い、自分の知識を広げる為に申し込みました。私と同じように頑張っているママ達と知り合い、先輩ママからも沢山のアドバイスを貰いました。今は支援者として頑張っています。

平野 ユリア（静岡県）

ママバンド誕生の話

長女が1歳になった4月。私たちは山口市に引っ越してきました。そして、よちよちの長女を連れ、子育て支援センターに通うようになりました。

いろいろなママさん、子どもたちと触れ合い、話をするも、なかなか友達、仲間、と呼べる関係になれずにいました。少しずつ仲良くなるも、何となく感じる距離感。やれやれ。数か月経って、顔なじみになったママさんと話していると、ふとやりたいことの話になりました。学生時代から楽器を吹いていたこと、一般の吹奏楽バンドに入っていたけど、今は子どもが小さいので、夜の練習になかなか行けなくなったこと。何ということでしょう！ 私も一緒でした。学生時代から吹いていた楽器を、どこかで吹きたいけれども場所がない。やりたいと思うことができない！ そのママさんによると、同じような境遇のママたちは何人かいるということ。私の心に一つ、灯りがともりました。

それから、その子育て支援センターで、楽器を吹きたいママを探し始めました。するとチラホラ。楽器仲間が集まり出しました。これは、うまくいけば発表の場が持てる！ 私たちはクリスマスに発表会をすることに決めました。支援センターでクリスマス会をしよう。お客さんに演奏を聴いてもらおう。練習や準備をワクワクして進めました。

本番当日、私たちはたくさんのお客さんに演奏を聴いてもらい、喜んでもらい、大成功を収めることができました。これがママバンド誕生の瞬間でした。

それから6年。ママバンドは幼稚園や保育園のイベント、児童センターや支援センターでの演奏で大忙しです。おんぶをしながら演奏するママ、ママたちの演奏で踊る子どもたち。今では、大人も子どもも合わせると100人にもなる大きなグループです。

「ママバンドの演奏を見ると元気がもらえる」とよく言っていただきます。それは演奏している私たちが楽しいから。支援センターでの少しの世間話がきっかけとなり、仲間が集まり、自分たちもお客さんも楽しめる、山口市のママを代表するグループになれたことは、簡単に言うと奇跡。でも本当は誰にでもできるちょっとした一歩の積み重ねなのでした。これからも、みんなが楽しいママバンドを楽しくやっていきたいと思います。

藤田 知美（山口県）
子育て支援交流広場ちゃちゃちゃ

花はきっと咲く

9年前、私が勤めていた子育て支援センターは新設されました。その立ち上げメンバーに、まだまだ新米の男性保育士である私と大ベテランの元園長先生であるN先生が選ばれ、私とN先生は、干支が一緒で年齢は三回り違ったり、身長は私の方が30センチ以上高かったりと、いろんな意味で凸凹コンビでした。

あとから聞いた話ですが、利用してくださった親子さんも凸凹コンビに驚いていたみたいです（笑）。

そんな二人で始めた子育て支援センター。初めは「子育て支援」とは？と戸惑いながらも試行錯誤して始まったのを今でも覚えています。そんな中、みんなの『家』を目指しながら、細やかさと温かさを大切にして日々取り組む中で、どんどん利用人数は増えていき、賑やかな子育て支援センターになりました！

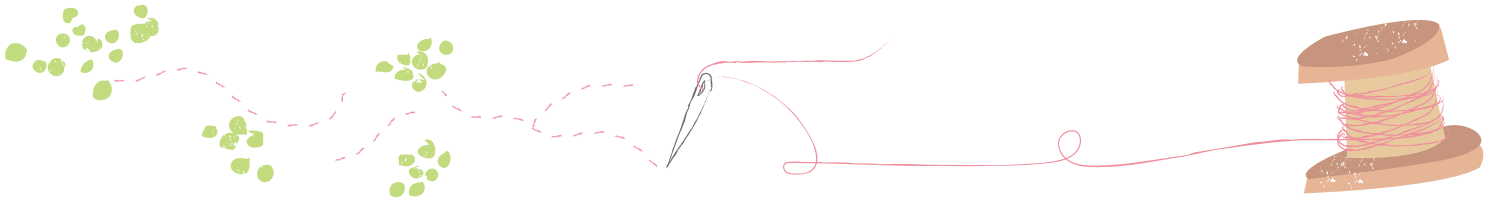
だけど、私たち職員は「お母さん方の為にこれでよかったのかな？」と常々感じていました。支援の成果が見えづらい…元園長先生であるN先生はおっしゃっていました。保育園は卒園まで成長発達を見届けることができる。しかし、子育て支援センターは年々低年齢化が進み、幼稚園入園等で大きくなるまで見届けることができない。また転勤族と言われる、数年スパンで各地を転々としているご家族も多く、他地域に行ってしまうとその後のご様子も分からず、自分達がしてきたことに自信がなくなることがあると。

しかし、自分達の行っていることが親子の為になることを信じて「子育て支援」に凸凹コンビで携わってきました。

新設から5年が経った冬。N先生は60代半ばでご病気となり天国へと旅立ってしまいました。そんな時、お母さん方のネットワークはすごいもので、北は北海道北部、南は鹿児島まで…私達がかかわってきたお母さん方から、N先生への温かいメッセージが数多く届きました。そこには近況も書かれていて、英語教師への夢を叶えたお母さん、民間団体を立ち上げ地域のフリーペーパーを作成し活躍されているお母さん方、ハンドメイドで教室を開いたり出品したりしているお母さん…みなさん口々に「この支援センターに出会えて背中を押してもらってよかった」と書いて下さっていました。涙が溢れてきました。

N先生。見てますか？ 全国のあちこちにいるお母さん方のキラキラしている姿を。私達のしてきたことは、蕾となって花を咲かせていますよ。これからも私はお母さん方、子どもたちの為に頑張ります！ 見守っていて下さいね。

柴田 亮（北海道）



私が救われた『つながり』

私は産後4か月で鬱になりました。原因は色々あったのですが、昨年引越しをして子育て広場に通うようになって、「『つながり』がなかったこと」も大きな原因のひとつだったのではないかと感じるようになりました。引越し前にも近所に子育て広場はありましたが、「どうせすぐ引越してしまうし…」とママ友作りを億劫に感じ、寒い時期でもあったので、ほとんど子供と二人きりで家に閉じこもっていました。そのうちに様々な要因が重なり、心の調子を崩してしまいました。治療後、元気になってほどなく今住んでいる場所に引っ越しました。引越す前から近所の公園や子育て広場を探し、そのときに見つけたのが、今通っている子育て広場とそこが開催する「なかまほいく」の情報でした。

「なかまほいく」とは10組ほどの親子が週一で集まり、1時間ほど子供の「預けあい」をするという活動です。初めて子供を預けた日、三人のお母さんたちとバスボムを作りながらおしゃべりをした日の衝撃が忘れられません。

「みんな全部共感してくれるし、私も共感できる！家族と話すのとは全然違う！同じ立場の『ママ友』と話すのってこんなに楽しいものだったんだ！」ほぼ初めましての人たちばかりだったのに、「同じぐらいの子を育てている母親同士」というだけで自然に『つながり』ができるのを感じました。

預かる日も、夢中でみんなの子供の面倒を見たり、我が子をなだめたり、その合間を縫っておしゃべりしていたらあっという間でした。そして全10回の「なかまほいく」が終わる頃には、すっかり仲良しの『つながり』が出来上がっていました。

「なかまほいく」を卒業してからも、その『つながり』は続いていて、何人かで定期的に集まったり、出かけたりしています。その際にみんなで話す日常の出来事。「この間子供がこんなこと言っていて…」「聞いてよ！昨日旦那がさ～…」どれも些細なことなのですが、感じたこと、考えたこと、ちょっと悩んでいることをすぐ聞いてもらえる、それが子育てにおいてどれだけありがたいことか…「育児は一人ではできない」。よく耳にするフレーズですが、気の合うママ友という『つながり』ができて初めて身を以て知ったのです。

ポレポレ（東京都）
大泉子育てのひろば わとと

「またね」

眠れない日々が、もう3年も続いている。美容院に最後に行ったのは、いつだったかな。着ているニットは毛玉だらけで、少しミルク臭い。旦那さんとの関係は悪化したままだ。

商店街の中にある子育てひろば、元々はカメラ屋さんだったとかで、ガラスのショーウィンドウはそのままになっている。

木のおもちゃで遊んでいる親子とスタッフっぽい人たちの姿。

笑い声がもれ聞こえてくる。

楽しそう。

ふと自分の姿を見返した。中に入れる訳もなく、荒れた家に帰った。また今日も子ども以外は誰とも会話をしなかったな。いや、そんな日なんて当たり前になっていたはずなのに、ぐしゃぐしゃになるまで泣いた。

次の日、久しぶりに鏡の前で髪をとかした。

子育てひろばの前を行ったり来たりをくりかえして三回目、やっと小さな一歩をふみだした。

帰り際にかけられた言葉を私は一生忘れない。

次の年、私は子育てひろばのボランティアスタッフになった。

子育てひろばに集まるのは、子どもとお母さん、お父さんだけじゃない。畑で採れた新鮮な野菜を持ってきてくれるおじいちゃん、色々な手遊びを教えてくれるおばあちゃん、勉強熱心な学生さんたちと他愛のない話をして笑いあったり、心揺さぶられて泣いてしまったり。それぞれの人生がほんの少し交わることで、今日も変わるし、明日はもっと変わったりする。

私は悲劇のヒロインママから笑顔のポジティブママに大変身をした。

来てくれてありがとう。

またいつでもおいでね。

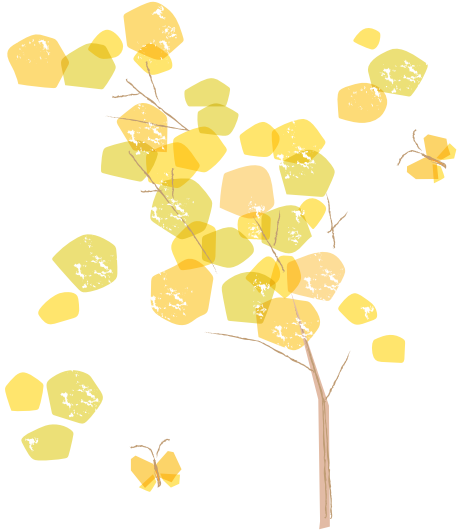
頑張っているあなたに小さな勇気への感謝と未来への約束を

たった三文字の言葉に込められた思いは、これからもずっと

つながっていく。

長安 里枝（山口県）

ほっとさろん西門前てとてと



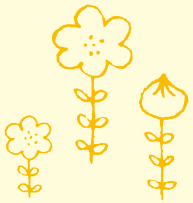
あしたもあそぼうね

おねえちゃんの友だちと遊ぶことが多くて、自分より小さな子は苦手だった息子。私のボランティア活動にくっついてきている間に、ボランティア仲間の小さな子たちと過ごす時間も多くなった。ひろばで「おにいちゃん」と呼ばれると照れくさそうにしていた。そう、僕はおにいちゃん。守ってあげたいという気持ちを、きっと嬉しく誇らしく思っていたのだろう。

あえばひろみ（神奈川県）

審査委員からのメッセージ

子育てひろばエッセイ＆フォト　審査を終えて



審査委員長　土谷 みち子さん（関東学院大学教育学部こども発達学科 教授）
審査委員　新沢 としひこさん（シンガーソングライター）
のぶみさん（絵本作家）
坂本 純子（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 副理事長）

審査委員長
土谷 みち子さん

プロフィール

関東学院大学 教育学部こども発達学科 教授
企業が実践した乳幼児期の親子教室のスタッフとして、親の学習プログラムや親子関係の調整、また就園前の乳幼児クラスの保育内容の開発をした経験があります。もう30年以上も前のことです。わが国の子育て支援の始まりが、長時間保育だったことが、とても心配でした。子どもが健やかに育ち、親も子どもをもった生活の充実感を感じられる社会にしたい、そのために支援者の迷いも支援したいと願い、臨床・実践活動・発達相談をしています。

ひろばから生まれた関係が自分や子どもの発見につながって

今年度はじめてエッセイ・フォト審査に関わらせていただきました。

応募作品を見せていただいた初回の感想は、応募してくださったことに、まず拍手！きっと他の方が作品を読んで、また写真を見て、私と同じ気持ち！よくわかる・わかる、こういうことあるよね！とたくさんの共感が集まってくると感じたからです。応募してくださった方は他の方の代弁者でもあります。

作品には、母親一人で孤軍奮闘するワンオペ育児、未知の土地でのアウェイ子育て、子どもをもつイメージと現実の違い、子どもの病気や育てにくさに疲れたママの姿、また祖父母の子育て支援の責任の重さ等々、現代の子育ての大変さが率直に表現されていました。でも、ひろばで人と出会いつながってくると、見知らぬ場所が親と子どもの大切な居場所となり、自分の可能性も広がって、そして子ども達が動き出して驚きのパワーを放ってくれていました。それはきっと、人と人が助けあって支え合って、そして完璧な子育てでなくていいよと、親と子が育ち合っていくプロセスの始まりかなと思います。

審査会場では、個性ある審査委員から、子どもの写真には思わずニンマリしながら、もっとママが笑ってくれたら良かったね！とか、タイトルがもうひと工夫！等々、ストレートな感想がいっぱいでした。でも、私たちはこれからのひろばに、このメッセージは大事だよね！震災があっても工夫が活きているね！等々、皆さんへのメッセージを盛り込んで審査したつもりです。これからも、ひろばでの出会いや関係から、親と子が自分自身を、またお互いを発見して、そして家族や地域の可能性が広がっていくことを願っています。

審査委員
新沢 としひこさん

プロフィール

シンガーソングライター
元保育者。保育講習会の講師。
作詞した作品「世界中のこどもたちが」「にじ」「さよならぼくたちのほいくえん」「はじめの一歩」など。作曲した作品「はらぺこあおむし」「おへそのあな」など。
神戸親和女子大学客員教授。中部学院大学客員教授。

これは「ひろば」という大きな一つの物語

この審査をしているといつも思うことがあります。みんな、同じことを書いている。

最初は孤独でまわりに頼る人もいない。「ひろば」のようなものがあることに気づく。

けれど、敷居が高いような気がして、なかなか入って行けない。勇気を持って扉を開けて入っていったら、こころよく迎えてくれた。そして通うようになって、今ではすっかり自分の居場所になった。

まるで、同じ物語かのように、繰り返し繰り返し、こういった文章が出てきます。これは、それだけ同じ思いをしている人たちが、全国にたくさんいて、みんな、同じように「ひろば」に出会い、同じように救われている、ということを見事に表しています。

この会は優秀なエッセイや写真を選ぶコンテストとはちょっと違います。たくさんの人たちが、みんなでひとつの物語を描いているという大変珍しく貴重な催しなのです。

そしてこの小冊子は、まだ「ひろば」の存在に気づいていない人たちに、是非知って欲しい、という願いが集まったものなのです。

できることなら全部の応募作を、読んでいただきたいと思います。小冊子のページ数もありますので、表現力豊かで、心情の伝わってくる文章を優先的に選ばせてもらっています。けれど実際は、応募作のどの作品にも気持ちが表れ、その気持ちに優劣は全くありません。

小さなおこさんがいる人は、是非手に取って読んで欲しいです。そして、こういうことに悩んでいるのは自分だけではないのだな、ということに気づいて欲しいです。

今子育て中では無いという人も、読むといろいろなことを感じると思います。このみんなの思いが、この本を通して、さらにたくさんの人に伝わっていくといいな、と思います。

この物語は、大きな一つの物語。そしてあなたの物語でもあるのです。

新沢としひこ

審査委員
のぶみさん

プロフィール

絵本作家
200冊以上絵本を出版。内閣府「子ども・子育て支援新制度」（すくすくジャパン！）キャラクターを手がける。絵本「ママがおばけになっちゃった！」シリーズ（講談社）60万部突破　アニメにNHK Eテレ「みいつけた！おててえほん」おかあさんといっしょ「げんしじんちゃん」「よわむしモンスターズ」。絵本に「このママにきーめた！」（サンマーク出版）「しんかんくん」シリーズ（あかね書房）「ぼく、仮面ライダーになる！」シリーズ（講談社）「おこらせるくん」（KADOKAWA）「うんこちゃん」シリーズ（ひかりのくに）など。ドキュメンタリー番組「情熱大陸」で描いた、「いのちのはな」（KADOKAWA）などがある。

今回初めてエッセイ、フォトの審査員を
させていただきました
僕は、絵本を書いてるんですが
改めてママは、すごいなって感じたや
調べてみると
ママの8割が孤独を感じたことがあるそうです
なぜそうなるかっていうと
人は、根本的に、
一人で子育て出来ないように
出来てるそうなんです
これ、NHKでもやってるんですよ
でもいまは、アウェイ育児っていう
周りに知り合いがいない場所で
子育てする人が増えたから
ママは、一人で子育てしなきゃいけない人が
増えたんだね
いやだよね、
ママたちは、ホントエライよ
そんな時に近くの広場があることで
どれだけ助かるママがいるのかを
知れたのは
僕にとって一番の宝物でした
なんで宝物かっていうと
僕は、ママと子どもが読む絵本かいてるから
その中に
ママの本音を書きたいなって
思いました
孤独を感じてるのは、
あなただけじゃないよ、って
少しでもわかると
広場にいくのと
同じように
絵本で癒されるかもしれないから
僕は、これからも
広場や
ママ、子どもたちの
居心地がいい場所を
絵本で作っていこうと思ってます
ママは、
たまには、
皿洗いしないでいい
ご飯コンビニのでもいい
洗濯物たたまなくていいと思う
それより
大切なのは、
ママが
家の中で太陽みたいに
光ってることだと思うからさ

絵本作家のぶみより

審査委員
坂本 純子

プロフィール

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会副理事長
NPO法人新座子育てネットワーク代表理事
1999年に子育て仲間と作ったサークルから地域子育て支援に取り組み、新座子育てネットワークを発足。地域子育て支援拠点や児童センターを運営するほか、父親支援を先駆的に研究開発し被災地における父子家庭支援をユニセフと展開。専門家や研究者、政府自治体、企業、海外NGOとも協働している。地域子育て支援拠点のガイドラインの策定や利用者支援事業の研究開発など、子育てに関する現代的課題に取り組んでいる。

よちよち歩きの息子を連れて、仲間と
ともに親子で集える居場所を求め、今日
はコミセン、明日は公民館と彷徨ってい
た頃から、もう20年。
日本中に「地域子育て支援拠点」が
7000か所以上も整備され、「子育てひ
ろばエッセイ&フォト」にもたくさんの
作品が届けられました。
一点一点、応募作品を読み進むうちに、
いつの間にか気持ちは昔に戻り、うるう
るしたり、ハラハラしたり、ほっこりし
たり……。
新米ママだったころの気分を、久しぶ
りに思い出しました。
20年前はよちよち歩きだった息子も、
今では見上げるほどに大きく育ち、アメ
リカで暮らしています。
遠い息子を思うとき、心に浮かぶのは、
不思議なことに、決まって幼児のころの
息子です。
子育てに一喜一憂したころの思い出
が、振り返ると人生の記憶をあたたかく
彩っています。
お母さんとして頑張ったご褒美は、子
育てが終わるころに届けられるものなの
かもしれません。

エッセイ&フォト作品を拝見しなが
ら、子育ての始まりに足を運んでほしい
地域子育て支援拠点が育ってきたことを
伝えていただきました。
ご応募くださった皆様、ありがとうご
ざいました。

編集後記

ひろば全協の調査では、地域子育て支援拠点（子育て支援センターや子育てひろばなど）を利用する母親のうち、72％の母親が「自分の育った町から離れた場所での子育て（＝アウェイ育児）」をしていました。また、拠点を通して生まれた「つながり」が、子育ての孤立感や負担感を軽減し、「アウェイ」を「ホーム」のように変える力を持っていることがわかりました。（※）

そこで、今年度は、親子の交流の場で生まれたあたたかな「つながり」の風景を作品集として広く社会に届けたいという思いのもと、エッセイとフォトを募集しました。

全国各地から届く原稿を読むたびに、ぬくもりのあるつながりの風景が目に浮かび、事務局スタッフも心が温かくなりました。「ようこそ」「よろしくね」「大丈夫？」「一緒にあそぼう」「またね」・・・。さりげない声かけで、張り詰めた緊張感がやわらぎ、少しずつ安心感へと変わっていく様子が多くの作品に描かれていました。

また、作品にはスタッフだけでなく、学生やシニアボランティアなどさまざまな人が登場します。多様な人々のつながりは、ひろばを超えて安心して子育てができる地域の力を高め、「ホーム」となる環境を育んでいると感じました。

子育てひろばが、地域への第一歩を踏み出す親子に寄り添い、全国どこでも子育て家庭の身近な日常の場となりますように。ひろば全協は、その役割と必要性を今後も社会に発信していきたいと思います。

最後になりましたが、作品をお寄せいただいた皆様、審査員の皆様、本事業の実施にあたり助成いただいた住友生命保険相互会社様にこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

2018年3月
NPO法人子育てひろば全国連絡協議会（ひろば全協）　事務局

（※）「地域子育て支援拠点に関するアンケート調査 2015-2016」
http://kosodatehiroba.com/136away.html

子育てひろば エッセイ&フォト

あたたかな"つながり"がアウェイをホームに

2018年3月発行

発行：NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
〒222-0037　横浜市港北区大倉山3-19-18
TEL：045-531-2888 / 045-546-9970
FAX：045-512-4971
E-mail：info@kosodatehiroba.com
http://kosodatehiroba.com

表紙イラスト：アサヌマリカ
本文イラスト：酒井チエ子
編集・デザイン：企業組合エコ・アド

※本誌の無断コピー、転載を禁じます。

平成29年度 住友生命 〜未来を強くする子育てプロジェクト〜 助成事業